

はたち 二十歳のつどい祝辞(令和5年1月8日)

20歳という人生の節目を迎え、故郷に集われた皆さんを心から祝福します。また、これまで深い愛情をもってお子様を立派に育てあげられたご家族の皆さまにも心からお祝い申し上げます。皆さんの表情は、多少の気負いも感じられ初々しいさが残るなか、とても晴れやかで眩しく、お招きいただいた私たちも明るい未来を感じられて大変うれしく思います。もちろん、久々の故郷での旧友との再会に心躍ってもいらっしやると思いますが、せっかくの節目でありますので、皆さんが過ごした20年の軌跡を、これまで皆さんを支えてくれたご両親や大勢の方々との出会いに感謝しつつ、思い返して噛みしめていただければ幸いです。

昨年4月から改正民法により、今年から成人式ではなく「二十歳のつどい」として祝賀式典を開催することになりましたが、本日の参加対象者は、令和4年度中に20歳となる平成14年から平成15年生まれの皆さんです。皆さんが生まれた年は、冬季ソルトレイクシティオリンピックが開催され、スピードスケートの清水宏保選手やスキーモーグルの里谷多英選手が活躍しました。また、日本と韓国の共同開催でFIFAワールドカップが開催され、日本は初のベスト16進出という快挙を達成しました。アジアでの初開催に加え、2か国共同開催という初の試みにより、大きな話題を集めました。さらに、当時の小泉純一郎首相が北朝鮮を電撃訪問し、初の日朝首脳会談が実現し、日本人の拉致事件が世界に広く認められました。東アジアの雪解け時代が近いと期待したのは、私だけではなかったと思いますが、それからの20年間において、この日韓関係の改善や日朝問題が全く進展を見られないのは、誠に残念としか言いようがありません。

さて、今年には平成30年9月6日発生した北海道胆振東部地震から5度目の春を迎えます。皆さんが高校1年生の秋に発生した北海道胆振東部地震から既に4年と4か月が経過しました。厚真町は多くの尊い命を失いましたが、それでも国や北海道のご尽力、全国から寄せられた物心両面のご支援により、堆積土砂の撤去、急斜地崩壊対策などの復旧工事も急ピッチで進みました。私たちは、「決して立ち止まることなく、先人や犠牲となられた方々の夢や希望を引き継ぐ決意」をこれまで繰り返し発信してまいりました。1000億円を超える公費の投入、3万人を超える関係職員のご尽力、5千人を超えるボランティアのご協力を決して忘れてはなりません。

これからも、被災者に寄り添いながら傷ついた心や被災森林再生に全力を尽くしてまいります。町民の皆さんが心から笑顔を取り戻し、美しい厚真町の自然が回復するまで、老若男女の別なく厚真町民が一丸となって、乗り越えていかなければならない長く険しい道のりが今後も続きます。特に、本日の二十歳の集いに参加された皆さんには、立場や形はそれぞれに違えても、厚真町の復興、新しい未来の創造にZ世代らしい若さあふれる知恵とエネルギーを是非、お貸しいただきたいと願っています。

皆さんは、これまでの3年にわたる新型コロナウイルスの世界的流行により、進学先での講義や人的交流などが大きな制約を受けて辛い想いをされてきたと思います。また、リアルタイムで目にするウクライナとロシアの紛争に、衝撃を受けていることと思います。発展途上国での権力争いではなく、国際連合安全保障常任理事国が当事者なのですから、事態はより深刻です。

私は、そんな困難が続く時代であっても、皆さんには「努力は希望を創造し、挑戦は人生を面白く意味あるものに変えてくれる」そう信じていただきたいと思います。そのためにもアインシュタインが語った「神聖な好奇心を失ってはならない」を皆さんへのエールとして贈らせていただきます。皆さんであれば、自分をアップデートしながら、これまでの自分探しの旅から、人生とは自分を創造していくことであると気づいてくれると期待しています。

厚真町も復興のステージへ前進するために、挑戦をキーワードに「カーボンニュートラル」「基幹産業である一次産業分野への Society5.0 いわゆる新技術取り込み」「社会課題解決に向けたデジタル化」、グリーン×グリーン×デジタル政策を柱とした50年後を展望した新しいまちづくりを構想しています。是非皆さんのご協力をお願いします。

結びに、不屈の魂のように先人から受け継いだバトンが次世代の皆様方に受け継がれることを願いながら、前途洋々たる皆様とご家族の皆様に幸多かれとご祈念申し上げ、祝辞といたします。本日は誠にありがとうございます。

令和5年1月8日

厚真町長 宮坂 尚市朗